



最高気温



川崎ゆきお

「今日は特別暑いすなあ」

「新記録が出そうですよ。私は楽しみにしています」

「何の記録ですか。何かスポーツでもありましたか」

「いやいや、気温の記録です」

「日本記録ですか」

「いやいや、この地方は日本記録になるような場所じゃない。過去もそうだしね。だから、この町での新記録ですよ。今夏最高気温じゃなく、観測史上最高ね」

「ほう」

「これは観測史という、まあ、歴史のようなものですよ。それに残るわけです」

「この町での最高気温は何度ですか」

「知りません」

「ほう」

「調べれば分かるんでしょうがね。インターネット上で公開されています。過去のね。ただ、ありますかなあ。データとして」

「あるんじゃないですか。気象庁はそれを記録するのが仕事でしょ」

「そればかりじゃないですが、観察記録は大事です」

「それで、今日、更新されそうなのですか」

「しかし、この町で最高気温が更新されてもニュースにならない。やはり日本記録でないかね。これは自分で調べて、やっと分かることです」

「じゃ、調べないと」

「新記録なら、そう表示されますが、まあ、大した温度じゃない。しかし、四十度越えでもすれば別ですよ。日本一じゃなくても、近くに並びます。そのとき、この町では観測史上最高になりましたとくる」

「なりますか。今日」

「よいところまでは行くんですがねえ」

「そうでしょ。この町は暑さで有名じゃないですから」

「それでも、今日はどきどきしながら、待っているんです。まだ昼前ですが、朝からかなり暑い。朝の全国ランクでは上位に入っています。この溜が効くかどうかです。スタートがいい。だから、結構延びるんじゃないですかあ」

「暑いのはいやですよ」

「だから、いっそのこと、記録が出るほど暑ければ納得できます。中途半端に暑いからいやなんですよ」

「寒いときはどうですか」

「この町は北国じゃないから、雪も降らない。しかし、この町としては最低気温になるような日もあるはず。つまり、この町としては記録的な寒さもあるんですよ。これは、数値的には大したことはない。わずかに零下になっている程度です。しかし、町としては大変なんですよ」

「しかし、今日は本当に暑いですよ。体に気をつけてください」

「はい、ありがとうございます。昼を過ぎたあたりの延びがどの程度なのか、朝の溜が何処まで効いているのか、昼からが見所です。ベストスリーに入るかもしれません」

「熱中症にならないでくださいよ」

「はいはい」

了